

八幡（谷口）彩子（熊本大）

目的 明治初期における翻訳家政書は、日本の家政学・家政教育に多大の影響を及ぼしたとみられてきた。しかしその日本における受容過程については十分な解明がなされていない。本研究は、これまでの原典解明・原典研究の成果をふまえ、翻訳家政書が「家事経済」教科書等に及ぼした影響の検討を中心に、明治初期における翻訳家政書が日本の家政学・家政教育史上において果たした役割と意義について考察することを目的とした。

方法 本研究では、家庭生活全般に関する記述がみられる7種類の明治初期における翻訳家政書ならびにその原典を資料とした。また明治13(1880)～16(1883)年に刊行された8種類の「家事経済」教科書との比較を行った。

結果 明治14(1881)年の小学校教則綱領「家事経済」の公布以降、明治16(1883)年までに「家事経済」教科書の内容が定型化していく過程がみられる。翻訳家政書と「家事経済」教科書との連続面は、1)家政、家事に関する概念の継承 2)女子教育としての家政教育の位置づけ、であり、不連続面は、3)女子における学問の軽視 4)自然科学をふまえた記述の希薄化と実用性の重視 5)内容の領域の狭まりと定型化 6)日本の生活様式をふまえた記述の採用、である。明治初期における翻訳家政書は男女への家政の教育の可能性を提示したが、学校教育において家事経済が女子に限定されたことにより、翻訳家政書の女性が主体となる家政の面が継承され、女性による家政に関する新たな学問の可能性が開かれた。